地理空間　2-1　32-50　2009

インドの華人社会とチャイナタウン
ーコルカタを中心にー

山下清海
筑波大学　大学院生命環境科学研究科

本研究は，インドの華人社会の地域的特色について考察するとともに，コルカタのチャイナタウンの現状を記述・分析することを目的とした。インドの華人は，イギリス植民地時代の首都であったコルカタに集中してきた。広東省籍が最も多く，特に客家人が最大多数を占め，彼らの経済活動は皮革業と靴製造業に特化してきた。1962年に発生した中印国境紛争に伴う両国の関係悪化により，海外へ「再移民」する華人が増加し，華人社会は衰退し，今日に至っている。インドにおいてチャイナタウンが唯一存在するコルカタには２つのチャイナタウンがある。ティレッタ・バザール地区は衰退しているが，中印国境紛争までは繁栄し，その名残として，会館，廟，華文学校などの華人の伝統的な施設が集中している。一方，タングラ地区は，近年の皮革業の衰退により，皮革工場から中国料理店への転換が著しく，今日では中国料理店集中地区となっている。
キーワード：　華人，チャイナタウン，客家人，皮革業，コルカタ，インド

Ⅰ　はじめに

華人社会に関する研究は学際性が高く，歴史学・文化人類学・社会学・経済学・政治学・教育学・文学などさまざまな学問分野からアプローチがなされてきた。筆者は，大学院入学以来，一貫して華人社会研究に取り組んできたが，他分野の研究者との交流を通して，華人社会研究において，地理学が重要な役割を果たすことができる主要な研究テーマは，華人の集落（チャイナタウン，華人村落など）に関する研究，および各地における華人社会の地域的特色の究明であると考えている（山下，2002：9-13）。

そこで，本研究においては，インドの華人社会の地域的特色について考察するとともに，コルカタのチャイナタウンの現状を記述・分析することを目的とする。 インドの華人社会については，世界の華人社会研究においても空白域となっており，先行研究は非常に乏しく，また関連する情報も少ない。

本研究の意義は，華人社会研究の空白域を埋める研究であるということだけでない。次に述べる2つの点からみても，インドは非常に興味深い研究対象地域である。すなわち，インドは，インドネシアやベトナム・ラオス・カンボジアなどと同様，中国と居住国との政治的関係の悪化による華人排斥を経験した国である。また，世界の華人社会の中では，福建人，広東人，潮州人が多数派を占める国が多い中で，世界的にみて華人社会の少数派である客家人（Hakka）が最大の華人方言集団の地位を占める国である。

次に，インドの華人社会に関する先行研究について検討しよう。インドの華人社会に関する学術的研究はきわめて乏しい。『印度華僑志』（華僑志編纂委員会編，1962）は，インドの華人社会について総合的に解説したものとして，最も重要な文献であるといえる。これは台湾側が出版した『華僑志』シリーズの中の1冊であり，このインド編は1960年前後までのインドの華人社会の状況を，歴史，人口，経済，教育，団体などに分けて記述しており，1962年に大規模な軍事衝突に発展した中印国境紛争以前のインド華人社会を理解する上で

非常に参考になる。

『印度華僑志』と同様，台湾側の華人関係の最高行政組織である僑務委員会が主として編集した『華僑経済年鑑』各年版のインドに関する記述は重要である。各国の解説の中には「華僑経済概況」の項目が設けられており，各年版の記述内容を追跡していくことにより，インド華人社会の変化を知ることができる。

一方，インドの華人社会に関する中国側発行のまとまった文献はないが，『華僑華人百科全書』（全12巻，1999～2002年発行）の社区民俗，教育科技，新聞出版，著作学術などの巻のインド関連項目の記述は有用である。また，中国華僑華人歴史研究所（北京）が発行する季刊雑誌「華僑華人研究」2008年第4期は，インド華僑・華人の特集号（印度華僑華人専題）となっており，計8編の論文・書評等が掲載されており，特に1960年代以降の華人社会の動向を知る上で貴重である。このほか，インドの華人社会を簡略的に論じたものとして，Oxfeld（1998），李・陳編（1991：234-238）などがある。なお，《華僑華人百科全書・著作学術巻》編輯委員会（2001：228）において，フランス語で出版されたコルカタの華人社会に関する学術専門書として，『加爾各答的華人－孟加拉之虎』（書名の中国語訳，日本語では『コルカタの華人－ベンガルの虎』の意味）が紹介されているが，筆者は未見である（Berjeaut，2000）。

本研究では，コルカタのチャイナタウンに関する考察に重点が置かれるが，コルカタのチャイナタウンに関する文献も乏しい。このような中で，Liang（2007）は，コルカタの華人社会の形成過程や経済活動の特色などについて，主として華人への聞き取り調査に基づいて明らかにしており，中国語文献にはない有益な情報が含まれている。このほか，沈（1992：105-111）は，中国，香港，シンガポールなどの中国語新聞の記事などを参考に，コルカタのチャイナタウンの事例を紹介している。また，竹内（2005）は，朝日新聞のインド特派員時代にコルカタのチャイナタウンを取材してまとめたリポートであり，筆者が現地調査を行う際に，非常に参考になった。文献が限られた状況の下では，インターネット上の中国語，英語，日本語で書かれたコルカタのチャイナタウンに関する情報も貴重である[1)]。

本稿では，研究目的を達成するために以下のようなアプローチをとる。

まず，文献にもとづいて，今日に至るまでのインドの華人社会の歴史的推移を整理する。次に，インド華人社会の地域的特色について，現地調査および文献をもとに，おもに社会文化的側面および経済的側面から考察する。最後に，インドにおいてチャイナタウンが存在する唯一の都市であるコルカタの事例に焦点を当て考察する。コルカタには，2つの地区にチャイナタウンが形成されているが，両地区のチャイナタウンにおいて，現地の華人からの聞き取り調査，土地利用調査，観察調査などを行い，これまでなかったチャイナタウンの地図の作成を試み，チャイナタウンの現状について記述・分析する。なお，現地調査は，2009年3月にコルカタおよびデリーで実施した。

Ⅱ　インドの華人社会の歴史的推移と地域的特色

1．華人社会の歴史的推移

インド・中国両国は3,000kmあまり国境を接しており，古くから人や物資の交流が活発に行われてきた。イギリスは，ムガル王朝時代（1526～1858年）の1600年，東インド会社を設立し，コルカタ（カルカッタ），ムンバイ（ボンベイ），チェンナイ（マドラス）を拠点に，インドの植民地化を進めた。特にコルカタはイギリス植民地時代の首都として発展した。

18世紀以降，インドと中国の貿易が盛んにな

り，多くの珠江デルタ出身の広東人が貿易のためにインドを訪れるようになり，コルカタに定住する華人も現れた。太平天国の乱（1851～64年）や辛亥革命（1911年）の時期には，国内が混乱する中，中国からインドに逃れて来る者が増加した（李・陳編，1991：235）。

1858年の Calcutta Review によれば，当時のコルカタの華人人口は約500人であり，大部分は男性で，華人女性は極めて少なかったと記されている。20世紀に入ってから，華人人口が増加し，1911～31年の間に，華人の男女比は8：1から4：1に縮小した。特に1930年代，40年代，日本軍の中国侵略により，中国国外へ避難する人々が増え，コルカタの華人女性人口が急増した（Oxfeld, 1998）。また，イギリスの植民地であったビルマの華人の多くが，日本支配を避けてインドに避難して来た。今日，コルカタの華人の多くは，この時期に移入したものである（李・陳編，1991：235；Liang，2007：403）。

第二次世界大戦後，共産党と国民党の内戦の結果，共産党が勝利をおさめ，1949年に中華人民共和国が成立すると，インドはただちに中華人民共和国を承認し，両国は良好な関係にあった。1954年には，周恩来・ネール会談で，平和五原則の協定が結ばれ，翌1955年には，周・ネール・スカルノが主導して，インドネシアのバンドンでアジア・アフリカ会議が開催された。しかし，1959年にチベット動乱が発生し，ダライ・ラマ14世がインドに逃亡し，多数のチベット族もインドやネパールに流入した。これにより，両国関係は悪化し，国境問題で対立するようになった。1962年10月に中印国境紛争が発生すると，数千人の華人がインドを離れ，インドの華人人口は激減した（Oxfeld, 1998）。

中印国境紛争に伴い，インド政府はインドの国家利益に反する活動をしている疑いのある華人の動きを制限する命令を出し，一部の華人に国外退去を命じた[2]。また，1962年11月には，治安維持法により，ダージリン地区の240人の華人が逮捕されるなど[3]，インド在住華人の6分の1（約2,000人）が拘留された[4]。1963年1月，中国政府は，インド政府が多数のインド在住の華人を長期にわたって拘留，虐待していると，インド政府に強く抗議している[5]。2,000名以上の華人がラジャスタン州にある収容所へ抑留された。そのほかに，インドから出国することを要求され，工場を解雇されたりした（Oxfeld, 1998）。これに対して中国政府は，1962年4月から8月まで3回にわたって帰還船を送り，2,398人の華人を中国に引き取った。彼らの多くは，広東省，雲南省，広西壮族自治区などの華僑農場に収容された（張秀明，2008：14-15）。

コルカタ在住の華人A氏（1950年インド出生，父親は広東省東莞からインドに来た）への筆者の聞き取りによれば，「中印国境紛争当時，私たちは非常に辛い思いをした。裕福な華人は，カナダ，香港など海外に逃げ出したが，私のように貧しい家の華人は，インドに残らざるを得なかった」と述べている。

中印国境紛争発生から1960年代末まで，インド在住華人の多くは，ヨーロッパ・オセアニア・北アメリカなどへ移住し，1971年，インドの漢族系華人の人口は11,000人にまで減少した。カナダのトロントには数千名のインド華人が「再移民」[6]しており，チェーンマイグレーション（連鎖移動）により，トロントの華人人口は増えている（Oxfeld, 1998）。1970年代後半以降，インド・中国の新たな関係悪化を危惧し，多様な経済活動を求めて，多くの華人がインドから出国した（欧，2008：46）。

第二次世界大戦後のインドの華人人口に関しては，インド側，中国側，台湾側いずれも正確な

統計はないが，表1は，主として台湾側の資料により，華人の推定人口を筆者がまとめたものである。中国側も台湾側も，基本的に中国国籍保有者で国外に居住している者を「華僑」，帰化して他国籍になった者を「華人」とよんでいる。本稿では，中国側の「華僑」,「華人」をまとめ，総称として「華人」とよぶ[7]。表1には漢族だけでなく，チベット族，その他の少数民族も含まれている。最近は，インドに流入するチベット族も多くなり，帰化してインド籍を取得する者も増え，正確な華人人口はますます把握しにくくなっているが，1980年代以降の漢族の華人は約2万人と推定されている。なお本稿では，インド華人の中でも漢族を中心に考察していく。

2．インドの華人社会の地域的特色

1）社会文化的特色

世界各地の華人社会をみると，地域によって華人の祖籍（中国語で「籍貫」）の構成には特色がみられるが，インドの場合にも明瞭な特色がある。1960年頃の推定によれば，チベット族などの少数民族を除いた漢族系華人の祖籍では，広東省籍者が最も多く全体の80％を占めた。そのほかには，湖北省籍者が9％，山東省籍者が8％，その他が3％となっていた。広東省籍者は，さらに客家人と広府人（旧広州府出身者，いわゆる広東人）に二分され，なかでも，広東省東部の山間部に位置する梅県[8]を祖籍とする者が多く，その割合は43％であった（華僑志編纂委員会編，1962：39-40）。

表1　第二次世界大戦後，インドにおける華人人口の推移

年	漢　族（人）	チベット族（人）	その他少数民族（人）注）	出　　典
1947	16,000	－	－	『印度華僑史』（台湾）
1950	2.3万あまり	－	－	インド政府調査．『印度華僑史』（台湾）に転載
1956	23,481	19,549	－	The Times of India Directory & Year Book 1956-57.『印度華僑史』（台湾）に転載
1959	23,322	34,800	483	『華僑経済年鑑　中華民国48年』（台湾）
1962	24,189	33,288	396	『華僑経済年鑑　中華民国51年』（台湾）
1963	19,539	34,255	406	『華僑経済年鑑　中華民国52年』（台湾）
1964	17,221	33,793	428	『華僑経済年鑑　中華民国53年』（台湾）
1969	12,926	58,730	－	『華僑経済年鑑　1969』（台湾）
1971	12,717	6万あまり	506	『華僑経済年鑑　中華民国60年』（台湾）
1976	14,660	65,045	594	『華僑経済年鑑　中華民国65-66年』（台湾）
1981	約2万	8万あまり	－	『華僑経済年鑑　中華民国70-71年』（台湾）
1986		～合計135,000～		『華人経済年鑑　1986』（北京）
1991	2万あまり	9万あまり	－	『華僑経済年鑑　中華民国80年』（台湾）
1995	約2万	約12万	千あまり	『華僑経済年鑑　中華民国84年』（台湾）
1997		～合計167,800～		Ma and Cartier eds.（2003）
1998	約2万	13万あまり	千あまり	『華僑経済年鑑　中華民国86年』（台湾）
2002	約2万	約12万	－	『華僑経済年鑑　亜太篇　中華民国90年～91年版』（台湾）

注）ウイグル族，カザフ族など．

イギリス植民地時代から，インドにおける華人は，コルカタに集中してきた。1964年のインドの漢族系華人の人口をみると，全国合計が17,221人であり，その81.8%（14,090人）がコルカタに居住していた（華僑経済年鑑編輯委員会編，1964）。インドの華人関係の同郷会館，廟，華文学校などの施設は，ほとんどがコルカタに設立された。これらコルカタの同郷会館や廟については，次章のコルカタのチャイナタウンの事例の考察において，地域に即して論じることにする。

華人社会においては，華文（中国語）教育が，伝統文化を維持する上できわめて重要である。インドの華文学校の歴史についてみると，コルカタの梅県籍の客家人は，1920年，印京華僑小学校を，客家人の団体である嘉応会館に設立した。その後，初級中学部を増設し，校名を梅光初中暨附属小学に変更した。同じく梅県籍客家人は，1934年，タングラ地区のチャイナタウンに，培梅小学を創設し，1953年には初級中学部に相当する専修部を増設し，培梅学校となった。これが，現在の培梅中学の前身である。建国小学校は，インドを視察した中華民国教育部関係者の進言によって，1943年に設立され，1955年，現在地のコルカタのティレッタ・バザール地区のチャイナタウンに移転された。

1949年に中華人民共和国が建設されると，華人社会の政治的対立を反映して，華文学校も，中国大陸系と台湾系に分かれることになった。1962年頃，インドには華文学校が13校あったが，そのうち，台湾系3校，台湾系に近い学校２校，中国大陸系8校となっていた（華僑志編纂委員会編，1962：62-77）。今日では，培梅学校がコルカタ唯一の華文学校となっている。

インドにおける最初の華字紙（中国語新聞）は，1933年にコルカタで創刊された印度日報（英語名，The Chinese Journal of India）である（華僑志編纂委員会編，1962：81）。第二次世界大戦中，インド駐留の中国の軍関係者や東南アジアからの華人避難民の増加で，華字紙は最盛期を迎えたが，戦後は，中華人民共和国と台湾の政治的対立などにより，華字紙も中国大陸系と台湾系に分かれ，華人読者の減少とともに，華字紙は衰退していった。インドの漢族の華人人口は，約2万人と推定されるが，現在，インドで発行されている華字紙は，印度商報（英語名 Overseas Chinese Commerce of India）のみである（図1）。印度商報は1969年3月10日に創刊されたもので，発行人は張國才，発行所はコルカタのタングラ地区となっている。初期の発行部数は約700部であったが，1990年代初めには400部程度まで減少した（《華僑華人百科全書・新聞出版巻》編輯委員会編，1999：480）。本紙は海外，中国，台湾関係のニュースが中心で，華人団体からの「通告」（お知らせ）なども掲載され，繁体字の中国語で書かれている。紙面は全体で4ページあり，印刷はところどころ不鮮明な部分もあり，フォントの大きさも不揃いで，切り貼りした痕跡も伺え，質素な作りである。

Overseas Chinese Commerce of India

印度商報

REGD. NO. SSRB/KOL/RMS/WB/RNP 204
Licensed to post without prepayment
WPP — 54 March 2000 Rs. 2.00

發行人 張國才 Published by K.T. Chang
6, New Tangra Road, Kolkata-700 046
Phone: 23230307/ 23294834 E-mail: oceanus@yahoo.co.in
Printed by Sheo Narain Pranch 287, Phear Lane, Kolkata-700 012 Ph. 23274637

公元二〇〇九年三月十四日 星期六 農曆二月十八日
一九六九年三月十日創刊 第 1 版

法國重返北約軍事指揮體系

法國重返北約軍事指揮體系的「時機到了」。法國總統薩爾科齊十一日在軍事學院舉行的「21世紀的法國，歐洲防務和北約」專題研討會的開幕式上式作報告。

薩爾科齊表示，重返北約軍事一體化機構並不會改變什麼，因為法國在一九六六年由戴高樂總統決定退出北約軍事一體化機構，即未完全退出北約，近年來法國還參與了許多北約的軍事行動。

他強調，重返北約軍事一體化機構也不會影響法國的「獨立性」，尤其在核能發展以及國防的自由上。他還為這个的世界局勢以及法國的安全環境有了改變。法國若繼續自我排除在北約軍事一體化機構之外，不利於法國參與北約的決策，也不利於在北約內部發揮影響力，推動歐洲防禦建設也是還盟友的疑慮。

薩爾科齊還說，法國將給另外幾國要求北約創訂「新的戰略設想」，使北約「更好地應對新威脅」，在「互補基礎上」推動加強歐盟與北約之間的「戰略夥伴關係」。

北約秘書長夏侯德伯對法國重返北約軍事一體化機構，表示熱烈歡迎。他指出，薩爾科齊的選擇是故國在過去十五年與北約的穩定和諧結果，也將促進法國與北約的新關係。

夏侯德伯還說，法國一直是北約的重要規劃，對北約的前前的軍事行動和任務的貢獻上是至關重要的。法國重返北約，充分地參與所有的政策和規劃將使北約更加強大，也將促北約和歐盟間原出更加緊密，信任和互補的新關係。

美期待密切合作

美國國防部發言人其瑞爾在一項聲明中說，在經過四十三年的缺席後，美國非常高興法國談論軍返北約組織的軍事指揮結構中。聲明中表示，歐洲安全共同

Wanted a Female Office Assistant.Candidates should be proficient in computers and be able to handle correspondence individually and converse in English/Chinese.

Interested persons are requested to apply to the Hony. Director,Huan Bao Tannery Owner's Council,119/1B Matheswartala Road,Kolkata 700 046.

校慶宣言

敬啓者:

吾人等擬組織慶祝母校(培梅中學)八十週年華誕籌備委員會，將於今年十二月下旬(或延至明年農曆春節前)隆重舉行盛大慶典。

緬懷當年先儒賢哲不辭勞苦，設所斯校，艱苦開學，於1929年，創立了培梅學校(即今日荼市場)由於學生人數逐年上升，而後從1946年起以不費絕節，同心協力的精神倡議建造新校，並向全體家長呼籲把皮廠裡的廢產品及購買價格的佣金無私的全部捐獻。經前後五年時間的籌集，總算可充作建造新校的全部費用。建造期間組與建築公司發生糾紛官司，總部了一段時間，但風雨的校舍終於落成校立於加爾各答市東郊之處，學校從1950年開始啓用，並且成為東南亞屈指可數的巨麗又壯觀之巨型學校。此乃由八十年前的茅竹簡陋的小校舍，進而演變成今日的雄偉秋學大樓。從此頭腦人才濟濟，春風化雨，幸幸學子弦歌不輟，傳承不斷。這是先賢賢們以堅毅不拔和捨己奉獻的精神，在歷大程度上以十年樹木，百年樹人的千秋大計造福後社。讓同儕世世代代的兒女們得以經受中華傳各領統文化的薰陶。對此，該們所有受過母校教

図1　インド唯一の華字紙「印度商報」

2）経済的特色

次に，インドの華人社会における経済活動の特色について検討する。世界の華人社会においては，華人の祖籍と職業との間には，非常に密接な関係がある。すなわち，特定の祖籍の華人は，特定の分野の職業に集中する傾向が強く，言い換えれば，特定の職業は，特定の祖籍の華人によって占められる現象がよくみられる[9)]。インドの華人社会においても，この傾向は顕著である。以下は，『華僑経済年鑑』の各年版および華僑志編纂委員会編（1962）を中心に，インド華人の経済活動を，特に華人の原籍と職業との結びつきに着目しながら論じる。

1959年当時の華人の職業構成をみると，全体の25％が皮革業，20％が靴製造業となっており，以下，歯科，雑貨，大工，小資本の商業（中国語で「小本売買」）がそれぞれ8％で，これらに続く料理業は5％と推測されていた（華僑経済年鑑編輯委員会編，1960：484）。すなわち，皮革業と皮革を原料とする靴製造業が当時の華人の経済活動の中では，最も重要であった[10)]。このことは，インド華人社会の最大の特色の一つであり，今日においても，この２つの産業が，インドの華人経済の基盤を形成している。のちに詳しく論じるが，インド華人の最も重要な職業である皮革業および靴製造業は，梅県籍の客家人が占有している。

華人の靴製造業と皮革業が，インドにおいて発達した要因としては，インドや隣国パキスタンにおいて原料の牛皮や羊皮などが豊富であったことも重要である（華僑経済年鑑編輯委員会編，1996：367）。そのほかに，インド特有の文化・習慣なども影響している。ヒンドゥー教のカースト制度によると，靴製造の仕事は指定カーストの仕事とみなされており，インドに移り住んだ華人にとって，比較的競争が少ないこの分野への進出は容易であった。客家人の中には，東南アジアで靴製造の技術を習得してから，インドに来て，靴店を開業した者もいる。コルカタのティレッタ・バザール地区近くのベンティンク通り（Bentinck Street）には，客家人経営の靴店が百軒以上もあり，中国語で「靴街」とよばれていた。20世紀の上四半期，客家人の靴製造業者はタングラ地区に移動した。この地区で最初の華人が皮革業を始めたのは1910年頃で，低湿地であるタングラ地区では，指定カーストのチャマール（chamar）が，華人の靴製造業者に材料を提供するために皮革業を行っていた。第二次世界大戦中，皮革業は発達し，戦中には70以上の客家人経営の皮革工場があった。第二次世界大戦後，この地区の皮革業はさらに発展し，コルカタの新しいチャイナタウンに発展していった。（Liang, 2007：406）。

インド社会において，華人の入歯師は重要な役割を果たしてきた。入歯を作って，患者に挿入する（中国語で「鑲牙」）技能を有する者（ここでは，入歯師とよぶ）が少なかったインドにおいて，華人の入歯師は貴重な存在であった。華人の入歯師のほとんどすべての祖籍は，湖北省天門地方であった。1931年前後，当時オランダ領であったジャワ島で入歯師の技能を習得した湖北省籍者がインドに渡り，その後同郷人の入歯師がインドで増加していった（華僑志編纂委員会編，1962：49-50）。湖北省籍の入歯師は，患者を求めてインド各地を移動する方法で生計を立てていたが，1962年の中印国境紛争後は，華人の行動や職業が制限されるようになり，多くがコルカタに定住するようになった（Liang, 2007：408）。

以上のように，インドにおける華人の職業選択においては，ホスト社会であるインド人の社会のわずかなニッチに経済活動を集中し発展させていくという華人の適応戦略（矢ケ﨑，2008）が認められる。

世界の華人社会において，中国料理店の経営は

華人の代表的な職業の一つであるが，インドにおいては，当初，中国料理店の主要な顧客は，欧米人をはじめとする外国人とインド人富裕層であった。ヒンドゥー教やイスラム教を信仰するインド人大衆の間には，中国料理はあまり浸透しなかった。第二次世界大戦中，インドに駐留する連合軍関係者が増加し，また東南アジアから逃れてきた華人も加わり，中国料理店が増加した。しかし，終戦後は，顧客の減少により，中国料理業は衰退した（華僑志編纂委員会編，1962：48-49）。

第二次世界大戦後，しだいに中国料理店に来客するインド人が増えていった。施主編（1969：インドの章［通しページなし］, p.6）は「この1, 2年，現地のインド人たちが，公然と家族連れで中国料理を食べに来るようになった」と記している。今回の筆者の現地調査によれば，インドの中国料理業をとりまく環境は大きく変化していることが明らかになった。デリーやコルカタの中国料理店の顧客のほとんどはインド人であるばかりでなく（図2），中国料理店ではない一般のインド人経営の料理店においても，メニューの中には，大衆的な中国料理が含まれており（図3），インド人のベジタリアン用の中国料理のメニューも提供されている場合が多い。よく見られる中国料理のメニューとしては，chow mein（焼そば，中国語で「炒麺」），Hakka noodle（客家式焼そば，中国語では「客家麺」），chopsuey（あんかけかた焼きそば），spring roll（春巻），noodle soup（汁そば，「湯麺」），hot and sour soup（スパイシースープ，「酸辣湯」）などがある。インド社会においては，中国料理の受容が確実に進んでいる。表2は，デリーの一般的なレストラン（中国料理店ではない）のメニューの中に含まれている中国料理を抜粋した

図2　コルカタ中心部の中国料理店
“Tung Fong” は中国語では「東方」を意味する．コルカタ市内の中心部，チョウロンギ（Chowronghee）地区に位置する．

図3　インド人経営の料理店
メニューには，インド料理，南インド料理とともに，中国料理（中央）がある．
（ニューデリー駅近く，メイン・バザール）

表2　デリーのレストランにおける中国料理メニュー

メニュー	価格（ルピー）
Chicken Spring Rolls（鶏肉入り春巻）	65
Vegetarian Spring Rolls（ベジタリアン用春巻）	60
Hot & Sour Soup（酸辣湯）	50
Cantonese Fried Rice（広東式炒飯）	75
Vegetarian Hakka Noodles（ベジタリアン用客家式あんかけ焼そば）	60
Chinese Chopsuey（中国式あんかけかた焼そば）	85
Vegetarian Chopsuey（ベジタリアン用あんかけ焼そば）	85
Tea	25
Coffee	30
Lassi（ラッスィー）	45

1ルピー＝約2円（2009年3月現在）
（ニューデリー，Karol Bagh　のレストランの例）

ものである。紅茶（Tea）が25ルピー（約50円）であるのに対し，焼そば類は60～85ルピー（120～170円）で食べることができ，大衆的なメニューとなっている。

Ⅲ　コルカタのチャイナタウン

1．コルカタの華人社会

コルカタの2009年の推定人口は15,414,859人であり，ムンバイ（21,347,412人），デリー（18,639,762人）についで，インド第3の人口を有する大都市である[11)]。1690年，イギリス東インド会社は，インド北東部のウエストベンガル州の州都であるコルカタに拠点を造った。セポイの反乱（1857～59）をイギリスが鎮圧し，インドはイギリスの直轄植民地となり，1911年に首都がデリーに移転されるまで，コルカタはインドの首都として，またガンジスデルタの特産品であるジュートの集散地，貿易港として発展した（北川，1978）。

チベット族などを除くインドの漢族系華人の大部分は，コルカタに集中していた。1959年頃の華人（漢族のみ）人口についてみると，インド全体で23,322人であったが，そのうちコルカタに15,740人（全体の67.5%）が集中し，以下，ムンバイ1,880人，アッサム980人の順となっていた（華僑経済年鑑編輯委員会編，1960：483）。

上述のように，インドの漢族系華人の3分の2がコルカタに集中し，コルカタはインドで唯一，チャイナタウンを有する都市であった。コルカタのチャイナタウンは，2つの地区に分かれて形成されてきた。すなわち，コルカタの中心部，ティレッタ・バザール（Tiretta Bazar，Bowbazar ともよばれる）地区と，コルカタ中心部から約5km南東の郊外に位置するタングラ（Tangra，別称ダーパー〈Dhapa〉）地区である（図4）。《華僑華

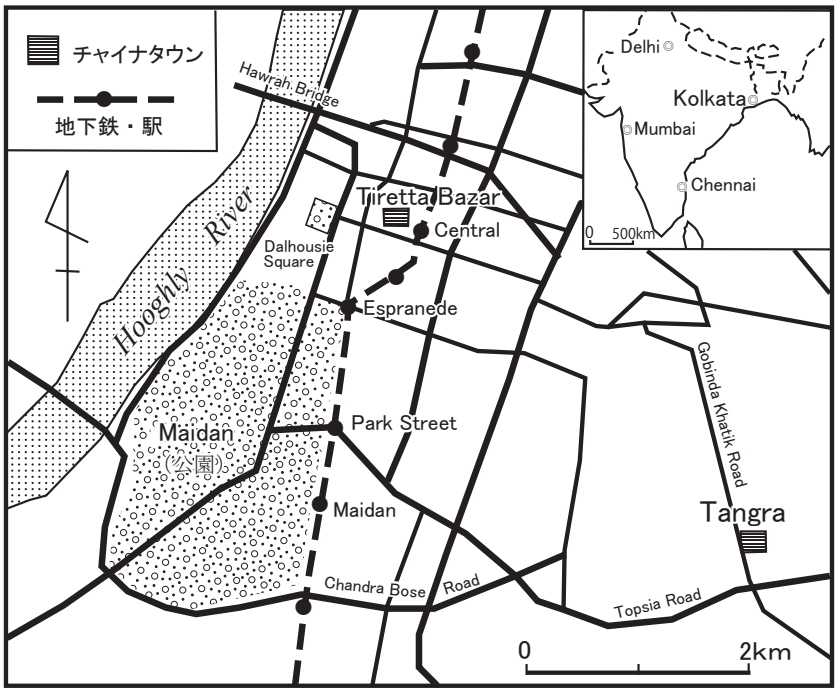

図4　コルカタのチャイナタウンの位置

（筆者作成）

人百科全書・社区民俗巻》編輯委員会編（2000：172）では，前者を「旧中国城」（「中国城」は中国語でチャイナタウンを意味する），後者を「新中国城」とよんでいる。本稿では，前者をティレッタ・バザール地区，後者をタングラ地区とよび，以下，これら２つのチャイナタウンについて，現地調査をもとに検討していくことにする。

２．ティレッタ・バザール地区のチャイナタウン

ティレッタ・バザール地区のチャイナタウンは，中国語では「唐人街」あるいは「中国街」と表記されることが多い。この地区は，比較的貧しいイスラム教徒が多い地区でもある。図5は，筆者が現地調査に基づいて作成したティレッタ・バザール地区のチャイナタウンとその周辺を示したものである。

コルカタの地下鉄はインドで最初に建設されたが，地下鉄セントラル（Central）駅の北出口から西へ，ルーシュン［魯迅：中国の文学者］通り（Lu Shun Sarani あるいは New C.I.T. Road とよば

図5　ティレッタ・バザール地区のチャイナタウン
（2009年3月の現地調査により筆者作成）

れる）を200～300ｍ歩くと，通りの左側に2ｍ前後の高さまで積み上げられたゴミの山がある。その背後には，かつてはコルカタを代表する高級中国料理店として栄えた赤レンガ造りの南京酒楼[12]の廃屋がある（図6）。

この地区において，かつてチャイナタウンとして栄えた名残を最も留めているのは，ブラックバーン・レーン（Black Burn Lane）とダムゼン・レーン（Damzen Lane）である。ここには，華人団体の会所や廟などが集中している。しかし，通りを歩いている華人の姿を見かけることは少ない。

義興会館は1930年に洪門会系の華人によって結成された団体で，そのため「義興」の名称を用いている（華僑志編纂委員会編，1962：87）。同会館の２階は関帝廟になっている。

ブラックバーン・レーンの角には，会寧会館，四会阮梁仏廟，湖北同郷会がある（図7）。会寧会館は，広東省旧肇慶府の四会県と広寧県を祖籍とする者によって組織された同郷会館であり，会寧会館の隣には，四会籍者の四会阮梁仏廟がある。会寧会館と四会阮梁仏廟の建物の2階には，湖北省籍の同郷会館である湖北同郷会がある。すでに述べたように，湖北省籍者の職業には，大きな特色があり，インドでは，伝統的に入歯師，のちに歯科医になるものが多かった。

ダムゼン・レーンには1962年の中印国境紛争勃発前には，多くの華人が居住しており，チャイナタウンの中心であった。その名残を示すのが天后（媽祖）廟である。廟内の碑文によれば，天后廟は1904年（光緒30年）に「広府人」（広東省旧広州府籍者）によって建立されたものである。また，碑文「重修唐人街天后廟序」（1999年記）によれば，天后廟の老朽化により，1999年には寄付金が集められ，修復工事が行われた。

南順会館は，ダムゼン・レーンの奥まった突き当りに位置している（図8）。南順会館は旧広州府の南海県と順徳県の出身者によって組織された同郷会であり，その会所の内部は，関帝廟になっている。1902年に設立されたもので，会員の多くは商業および大工業に従事していた（華僑志編纂委員会編，1962：91）。南順会館の敷地内には，建国小学校がある。チャイナタウンの衰退により，華人人口が減少し，現在，建国小学校で学んでいる生徒は周辺に住むインド人（多くはイスラム教徒）のみである。

図6　南京酒楼の廃屋
手前のゴミの山の後の建物が旧南京酒楼.
（2009年3月撮影．以下，写真は同じ）

図7　会寧会館・湖北同郷会・四会阮梁仏廟
1階右側は会寧会館，1階左側は四会阮梁仏廟，2階は湖北同郷会.

図8　南順会館内部の関帝廟

今日のティレッタ・バザール地区のチャイナタウンの中で，最も規模が大きく，華人が集まる会館は四邑会館であり（図9），1907年に設立された（華僑志編纂委員会編，1962：90）。四邑とは，広東省の珠江デルタに位置し，中華民国時代の広州府に属する台山県（旧新寧県），新会県，肇慶府に属する恩平県，開平県の4県出身者が結成した同郷会館である。四邑籍の広東人は，アメリカ，カナダ，オーストラリアなどの華人社会では，主流をなしてきた集団である。四邑会館の1階は集会場になっており，近くに住む高齢の華人たちが訪れ，談笑したり，新聞を読んだりしている。四邑会館の2階は観世音菩薩を主神としてまつる観音廟になっている。

現在では衰退しているが，かつて繁栄したチャイナタウンであったことを示す景観の1つとして，「金舗」の看板がある。ルーシュン通りに面した誠昌と寶昌は，現在，ともにソースや麺をはじめとする食材の販売店であるが，元は金行（金舗）であり，「誠昌金舗」や「寶昌金舗」の漢字で書かれた扁額が，店内や店頭に掲げられている[13]（図10，11）。東南アジアのチャイナタウンには，金を売買する金行が集中しているのが特徴であるが（山下，1987：161-165），1962年に出版された『印度華僑志』にも，コルカタの「中国街」には華人経営の「金店業」が集中している，と述べている（華僑志編纂委員会編，1962：55-56））。「誠昌金舗」は，現在，「誠昌醤園」として，チリソース，ガーリックソース，醤油などを製造販売し，その工場は，タングラ地区のチャイナタウンにある。また，中国，東南アジア，インドなどから輸入した中国

図9　四邑会館
会館前の通りは，周辺のスラム地区の子供たちの遊び場となっている．

図10　誠昌醤園の店舗内部
上部の扁額「誠昌金舗」は，かつて金行を営業していた当時のもの．写真右側の電話中の男性が主人．

図11 「寶昌金鋪」の看板を掲げた店舗
英語名は Pou Chon Brotehers Ltd. 店舗前のルーシュン通り（Lu Shun Sarani）には，人力車も通る．

料理の調味料を中心に販売している。

地利飯店は，ティレッタ・バザール地区で営業している数少ない中国料理店である（図12）。80歳あまりの経営者（男性）の父母は広東省の梅県から来た客家人で，彼自身はインドで生まれた。彼の話によれば，現在，この付近に住んでいる華人は大幅に減少したが，1962年の中印国境紛争前，ティレッタ・バザール地区のチャイナタウンには多数の華人が住み，賑わっていたという。特に南京酒楼は非常に繁栄しており，コルカタの日本領事館関係者や日本人ビジネスマンも，よく訪れていたという。

今日，ティレッタ・バザール地区のチャイナタウンで，通りを歩いている華人の姿を見かけることは少ない。貧しい多数のインド人が，かつて華人が居住していた家屋や商店に住みついており，中印国境紛争が発生する以前繁栄していたチャイ

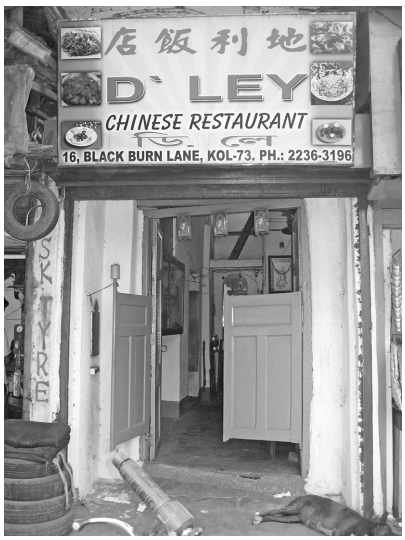

図12 地利飯店
小さな中国料理店ではあるが，周辺に住む華人にとっては，中国料理を味わえる貴重な存在となっている．

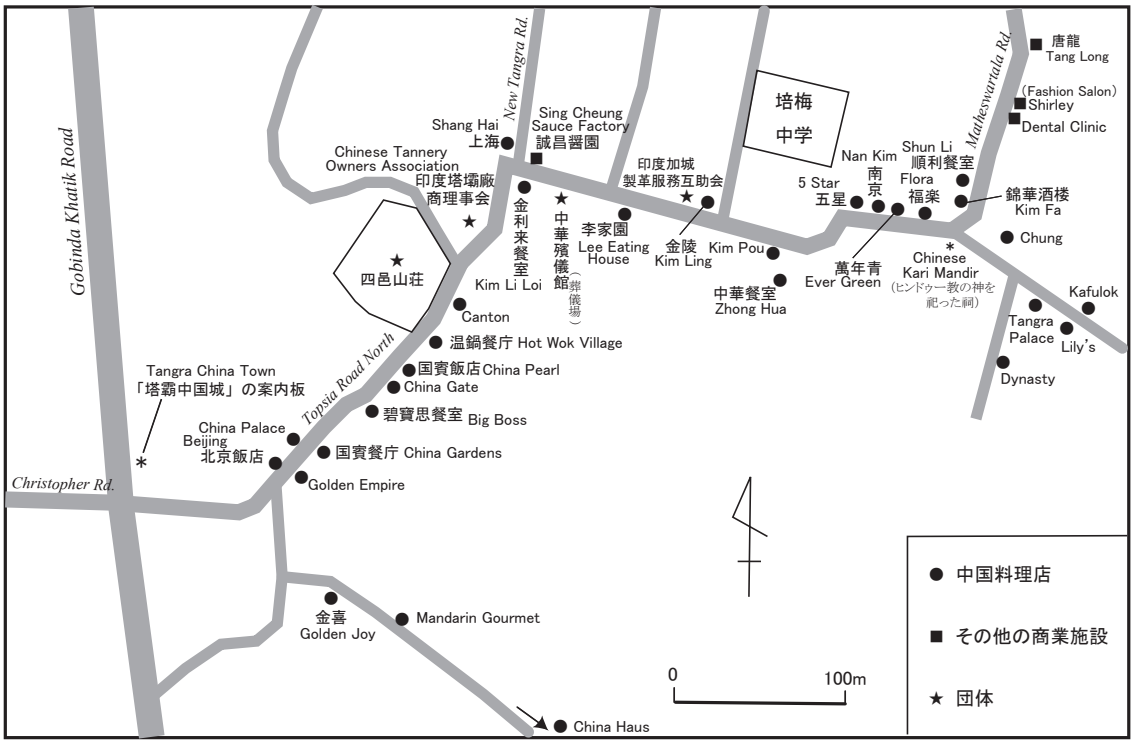

図13　タングラ地区のチャイナタウン

（2009年3月の現地調査により筆者作成）

ナタウンは，衰退化が著しい状況にある。しかし，春節（旧正月）には，海外に再移民していた華人がコルカタに里帰りし，龍舞や獅子舞がチャイナタウンの路地を練り歩き，一時的にチャイナタウンらしさを取り戻す。

3．タングラ地区のチャイナタウン

コルカタはガンジス川の下流デルタに位置し，支流のフーグリ川左岸の自然堤防上に市街地が形成された。Google の衛星写真を見ると，タングラ地区周辺には沼沢地が多くみられることから，この地区は，地形的にみると，フーグリ川の後背湿地に位置していると思われる。タングラ地区のあるコルカタの東郊は，製造業施設が多く，またスラムが多い地区であった[14]。

正確な華人人口に関する統計はないが，中国の新華社の記事（2008年2月18日）は，タングラ地区（図13）には1,500人近くの華人が生活しており，30軒あまりの華人経営の中国料理店があると報じている[15]。タングラ地区のチャイナタウンの西側を南北に走るゴビンダカティク通り（Gobinda Khatik Road）脇に，チャイナタウンの案内板がある（図14）。その案内板には，上から中国語で「塔壩中国城」，英語で「Tangra China Town」，そしてベンガル語で，最後にヒンディー語で書かれている。この案内板から，東へ入っていくとタングラ地区のチャイナタウンになる。ゴビンダカティク通りにはチャイナタウンらしい景観は見られず，この案内板がなければ，一般の人々はチャイナタウンの存在に気付かずに通り過

図14　チャイナタウンの案内板
案内板には中国語，英語，ベンガル語，ヒンディー語の順で書かれている．

図15　印度塔壩廠商理事会
タングラ地区で皮革工場を経営している華人の同業団体．

ごしてしまうに違いない。

インドの皮革業はタングラ地区に集中しており，この地区の皮革工場の経営者のほとんどすべては，広東省梅県地方を祖籍とする客家人である。図12の中にある印度塔壩廠理事会は（図15），1949年にタングラ地区（壩廠 Dhapa）の皮革工場経営者によって設立された団体で，後述する培梅学校の経営も支えている（華僑志編纂委員会編，1962：88）。皮革工場の経営者の家族は工場内に居住し，職住同一が基本で，小規模経営が多かった。

一方，靴製造業は，第二次世界大戦中に非常に隆盛し，靴店は300軒あまりを数え，戦後，この分野へのインド人の進出に伴い，タングラ地区の靴店が減少した影響で，華人経営の皮革工場は，1959年当時200あまりとなった（華僑経済年鑑編輯委員会編，1960：484-485）。

1962年の中印国境紛争以後，インド政府の華人排斥政策により，皮革工場を閉鎖し，海外へ再移民する華人も多かった。近年，人造皮革の製品が増加し，またインド企業の皮革業への参入に伴い，天然皮革を製造してきた当地の華人の皮革業も衰退化してきた。さらに十数年前から皮革工場の環境汚染[16]への批判が高まり，1995年には，ウエストベンガル州の最高裁判所は，タングラ地区の皮革工場の他地域への移転命令を下し，皮革工場を閉鎖する華人が増え[17]，後述する中国料理業へ転換する例が多くなった。

今日でも，タングラ地区のチャイナタウンの路上では，皮革工場で生産された皮革をリヤカーに積んで運んで行くインド人労働者の姿がよく見られる（図16）。入口の鉄製の扉が赤く塗られた華人経営の皮革工場の内部に入ると，なめし作業に使われる薬品の鼻をつく臭いがし，毛のついたままの牛皮が積まれている（図17）。薄暗い工場内で作業をしているのは，華人ではなく，すべてインド人である。

チャイナタウンとはいっても，路上で華人を見かけることは少ない。しかし，華人の住居や工場では，門を赤色に塗装し，「吉祥如意」，「歳歳平安」，「招財進宝」などと書いた門聯を貼り，門神を画くなど，景観からそれらの建物が華人の所有であることが容易にわかる（図18）。

通りを歩いていると，通りの左右に多数の中国料理店があるが，ほとんどの店の前には，客の誘導を兼ねたガードマン的な役割をするインド人が椅子に座って，来客を待っている。この地区の中

図16　皮革をリヤカーで運ぶインド人労働者

図17　華人経営の皮革工場の内部

図18　華人の住居
鉄製の門とその周囲は赤色に塗装されている．隣家はインド人の住宅.

国料理店の敷地利用には特色がある。トラックが通過できるような鉄製の赤く塗られた門をくぐって敷地の中に入ると，自動車が数台駐車できる広いスペースがあり，その奥に中国料理店があるというパターンが多い（図19）。これは，かつての皮革工場を改造して，中国料理店を開業したためである。筆者の調査では，図13に示したように，2009年3月現在，29軒の中国料理店を確認した。

中国料理店の従業員はほとんどすべてインド人で，一般に華人はレジ台に座っているのみである。中国料理店の客は大半がインド人である。昼食時は客が少なく，夕食時に自動車でタングラ地区のチャイナタウンに中国料理を食べに来るインド人が多い。

地元の華人の話によれば，現状では，中国料理店の数が多すぎて過当競争状態にあり，一部の中国料理店を除くと経営は苦しいようである。しかし，中国料理店経営者には，カナダをはじめ海外在住の家族が多く，彼らからの海外送金が，中国料理店の経営収入の不足を補っているとのことである。

タングラ地区における華人の重要な施設の1つは，培梅学校（1934年設立）である。培梅学校の

図19　皮革工場を改装して造られた規模の大きな中国料理店
中国語の店名は「碧寶思餐室」.

敷地は広く，校舎の建物も3階建て，その規模の大きさは，この地区が華人で栄えた時代を思い起こさせる（図20）。培梅学校はもともと台湾系の華文学校であり，繁体字で書かれた台湾式の教科書を用いて授業を行っていた。しかし，今日ではクラスによっては，簡体字で書かれた中国大陸式の教科書も用いている。培梅学校では，平日は英語教育の学校に通っている華人生徒に，週末に中国語を教えるための「補習中文」コースを設けており，なかには7，8人のインド人生徒も含まれている。校舎の屋上には，関帝廟が設けられており，春節の際には，参拝に訪れる大勢の華人でにぎわう。

華人の宗教関連施設としては，タングラ地区のチャイナタウンには，図13中にも示した四邑山荘がある。これは，前述した広東省珠江デルタの四邑地方出身者が組織した四邑会館所有の共同墓地である。また，同図中のChinese Kari Mandirは，ヒンドゥー教のカーリー女神（図21）を祀った祠であり，宗教面での華人の伝統文化のインド社会への融合の一つの例を示している（張幸，2008：56-57）。

Ⅳ　おわりに

本稿では，世界の華人社会研究においても空白域となっており，これまで先行研究が乏しかったインドの華人社会を対象に，その地域的特色について考察するとともに，インドで唯一チャイナタウンを有する都市であるコルカタのチャイナタウンの現状を記述・分析してきた。その結果，明らかになった事項は，以下のようにまとめることができる。

インドの華人は，イギリス植民地時代の首都であったコルカタに集中してきた。華人の祖籍では，広東省籍が多数を占め，特に梅県出身の客家人が最大多数を占めた。客家人の経済活動は皮革業と靴製造業に特化した。インドにおける華人の職業選択においては，ホスト社会であるヒンドゥー教を中心とするインド社会のわずかなニッチに経済活動を集中し発展させていくという華人の適応戦略が認められる。

1959年のチベット動乱により，チベットからチベット族難民がインドへ大量に流入した。一方，1962年に発生した中印国境紛争に伴うインド政府の華人排斥政策の大きな影響を受け，カナダや

図20　培梅中学
正面の校舎の屋上には，関帝廟の屋根が見える．

図21　カーリー女神
Chinese Kari Mandir（Mandirは寺院の意味）の内部．

オーストラリアなど海外へ再移民する漢族系華人が増加し，華人社会は衰退していき，今日に至っている。

1965年にインドネシアで発生した9・30事件や1975年のベトナム戦争終了後のベトナム・ラオス・カンボジアの社会主義化など居住国と中国との政治的関係の悪化による華人社会の衰退・停滞が，インドの華人社会においても同様に認められた。

コルカタには市中心部のティレッタ・バザール地区および南東郊外のテングラ地区にチャイナタウンが形成されている。ティレッタ・バザール地区のチャイナタウンは，中印国境紛争までは繁栄し，その名残として，会館，廟などの華人の伝統的な施設が今日でもみられる。しかし，中印国境紛争後の華人の海外への再移民による華人人口の減少により，この地区のチャイナタウンは衰退した。一方，テングラ地区のチャイナタウンは，華人経営の皮革工場の集中により形成された新しいチャイナタウンである。近年の皮革業の衰退により，皮革工場の中国料理店への転換が著しく，テングラ地区のチャイナタウンは，今日では中国料理店集中地区となっている。これは，インドにおける中国料理の受容の進展，および華人の職業としての中国料理業の発展の可能性を示している。人口11.9億（2008年推定）を有するインドにおいて，インドに居住する漢族系華人が1万～2万人程度というのは極めて少数である。1990代以降，インド・中国の両国関係は改善してきており，インドの経済発展に伴い，市場には安価な中国製品が出回って来ている。最近では，中国からの新移民（ニューカマーズ）も増加しており，その数は1991～2001年までに11,100人あまりに達しているといわれる（張秀明，2008：19）。インドにおいても，東ヨーロッパ，西アジア，アフリカ，南アメリカ（山下，2007）などで見られるように，ビジネスチャンスを求めて，中国から流入する新移民のさらなる増加が予想される。これに伴い，衰退・停滞してきたインドの華人社会も今後，変容，発展していくものと思われる。

本研究を遂行するにあたり，平成18～21年度日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究（A）「日本におけるエスニック地理学の構築のための理論的および実証的研究」（課題番号18202027，研究代表者：山下清海）の研究費の一部を使用した。

注

1）例えば，「印度加爾各答塔壩中国城」（2006年6月5日，中国新聞網）http://www.chinanews.com.cn/news/2006/2006-06-05/8/739449.shtml（最終閲覧日：2009年3月5日），「コルカタで中華三昧（1）」（2006年2月17日）http://www.indo.to/index.php?itemid=329（最終閲覧日：2009年3月5日）など。

2）朝日新聞1962年11月16日「危険な中国人に措置　インド内相が言明」。

3）朝日新聞1962年11月21日「中国人240人逮捕　ダージリンで」。

4）朝日新聞1962年11月27日夕刊「インド在住中国人の6分の1に上る　逮捕すでに二千人」。

5）朝日新聞1963年1月20日「中共，インドに明確な回答要求　在印中国人引取り問題」）。

6）中国では，主として改革開放政策実施後の海外への新しい移民を「新移民」とよび，一旦，東南アジアや南アメリカなどへ移住した華人が，さらに他の地域へ移住していく現象を「再移民」とよんでいる（山下，2005：24）。

7）中国側の定義によれば，中国以外の国籍を有している中国系住民は「華人」とよび，両者をまとめて取り扱う場合には，「華僑華人」という呼称を用いている。一般に東南アジアをはじめ多くの研究者は，中国側の定義による「華僑」と「華人」をまとめ，総称として「華人」の語句を用いているが，本稿においてもこれに従う。「華人」「華僑」の用語に関しては，山下（2005：18-19）参照。

8）梅県は，現在の梅州市の中心地であり，客家人にとっては，客家人居住地域の「首都」的な地位を有している。筆者の東南アジアや台湾における客家人の調査によると，梅県で用いられている方言は，最も標準的な客家方言といわれ，梅県出身の客家人は，客家人の中でも最も主流であるとみなされている。客家

人が「私は梅県の客家人です」という言い方には，強い誇りが感じられる。

9) 筆者は，シンガポールの華人の経済活動において，福建人，潮州人，広東人，客家人など華人方言集団の間で，地域的にも，経済的にも，相互に「すみわけ」がみられることについて論じた（山下，1988：72-80）。

10) 北川（1979：87）は，「インドでは華僑の進出は殆どなく，わずかにカルカッタにのみ中国人街があり（中略），その多くは靴屋をやっており，社会的地位は低い。住居はCBDの北東行政区42に集中している。」と記している。北東行政区42は，ティレッタ・バザールが位置する地区である。

11) World Gazetteer, India: metropolitan areas http://www.world-gazetteer.com/wg.php?x=&men=gcis&lng=en&dat=80&geo=-104&srt=pnan&col=aohdq&msz=1500&va=&pt=a（最終閲覧日：2009年3月5日）。

12) 南京酒楼は1927年に開業し，中国情緒豊かな豪華な設備で，コルカタで最も有名な中国料理店の1つで，イギリス領インドの上流社会の人々や外交官などの顧客が多かった（施主編，1969：インドの項，p.10）。

13) 華僑経済年鑑編輯委員会編（1960：488）は，第二次世界大戦中は東南アジアからインドに避難してきた華人が多く，コルカタのチャイナタウンの金行も栄えていたが，戦後，金行の多くは閉店し，当時，華人経営の金行は「誠昌」と「信興」の2軒のみとなったと述べている。

14) 北川（1978）に掲載されているコルカタの地域区分図，スラムの分布図などによる。

15)「加爾各答塔壩中国城：保留舞龍拝年祭祖伝統」（中国新聞網，2008年2月19日）http://www.chinanews.com.cn/hr/trj/news/2008/02-19/1167265.shtml（最終閲覧日：2009年3月5日）。

16) 日本革類業卸売協同組合のホームページ http://www.nikkaku.or.jp/ によれば，皮なめしには大きく分けて，木の皮や果実などから抽出したタンニン（一般に渋などともいう）によってなめすタンニンなめしと，金属化合物である塩基性硫酸クローム液を用いてなめすクロームなめしがある。タングラ地区の皮革工場の環境汚染問題とは，なめし作業に使用した薬品の廃液の問題と思われる。

17) 前掲15）参照。

文献

北川建次（1978）：カルカッタ．織田武雄編：『南アジア（世界地理4）』139-151，朝倉書店．

北川建次（1979）：カルカッタ．高野史男ほか編：『世界の大都市（下）』73-92，大明堂．

竹内幸史（2005）：インド－コルカタのチャイナタウン－．山下清海編『華人社会がわかる本－中国から世界へ広がるネットワークの歴史，社会，文化－』明石書店，192-197．

矢ケ崎典隆（2008）：エスニック集団の適応戦略．山下清海編：『エスニック・ワールド－世界と日本のエスニック社会』明石書店，20-27．

山下清海（1987）：『東南アジアのチャイナタウン』古今書院．

山下清海（1988）：『シンガポールの華人社会』大明堂．

山下清海（2002）：『東南アジア華人社会と中国僑郷－華人・チャイナタウンの人文地理学的考察－』古今書院．

山下清海（2005）：華人社会の見方と現状．山下清海編：『華人社会がわかる本－中国から世界へ広がるネットワークの歴史，社会，文化－』16-24，明石書店．

山下清海編（2005）：『華人社会がわかる本－中国から世界へ広がるネットワークの歴史，社会，文化－』明石書店．

山下清海（2007）：ブラジル・サンパウロ－東洋街の変容と中国新移民の増加－．華僑華人研究，**4**，81-98．

《華僑華人百科全書・法律条令政策巻》編輯委員会編（2000）：『華僑華人百科全書・法律条令政策巻』中国華僑出版社，北京．

《華僑華人百科全書・教育科技巻》編輯委員会編（1999）：『華僑華人百科全書・教育科技巻』中国華僑出版社，北京．

《華僑華人百科全書・社区民俗巻》編輯委員会編（2000）：『華僑華人百科全書・社区民俗巻』中国華僑出版社，北京．

《華僑華人百科全書・新聞出版巻》編輯委員会編（1999）：『華僑華人百科全書・新聞出版巻』中国華僑出版社，北京．

《華僑華人百科全書・著作学術巻》編輯委員会編（2001）：『華僑華人百科全書・著作学術巻』中国華僑出版社，北京．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1960）：『華僑経済年鑑　中華民国48年』華僑経済年鑑編輯委員会，台北．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1962）：『華僑経済年鑑　中華民国51年』華僑経済年鑑編輯委員会，台北．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1963）：『華僑経済年鑑　中華民国52年』華僑経済年鑑編輯委員会，台北．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1964）：『華僑経済年鑑　中華民国53年』華僑経済年鑑編輯委員会，台北．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1971）：『華僑経済年鑑　中華民国60年』世界華商貿易会議総聯絡処，台北．

華僑経済年鑑編輯委員会編（1977）：『華僑経済年鑑　中

華民国65-66年』世界華商貿易会議総聯絡処，台北.
華僑経済年鑑編輯委員会編（1982）：『華僑経済年鑑　中華民国70-71年』世界華商貿易会議総聯絡処，台北.
華僑経済年鑑編輯委員会編（1996）：『華僑経済年鑑　中華民国84年』僑務委員会，台北.
華僑志編纂委員会編（1962）：『印度華僑志』華僑志編纂委員会，台北.
《華人経済年鑑》編輯委員会編（1996）：『華人経済年鑑1996』社会科学文献出版社，北京.
環球経済社編（1998）：『華僑経済年鑑　中華民国86年版』僑務委員会，台北.
李原・陳大璋編（1991）：『海外華人及其居住地概況』中国華僑出版公司，北京.
欧愛玲著，張銘・趙莉苹訳（2008）：依旧是“客人”－印度加爾各答客家人認同的重塑．華僑華人歴史研究，2008年第4期，33-48.
沈立新（1992）：『世界各国唐人街紀実』四川人民出版社，成都.
施応元主編（1969）：『世界経済年鑑1969』世界華僑年鑑社有限公司，台北.
張幸（2008）：文化認同的伝承与創新－印度加爾各答華人的多元化宗教信仰研究．華僑華人歴史研究，2008年第4期，79-58.
張秀明（2008）：被辺縁化的群体－印度華僑華人社会的変遷．華僑華人歴史研究，2008年第4期，6-23.
中華経済研究院編（2003）：『華僑経済年鑑－亜太篇　中華民国90年～91年版』中華民国僑務委員会，台北.
Berjeaut, de J.（2000）：*Chinois à Calcutta: Les Tigres du Bengale*. L'Harmattan.
Liang, J.（2007）：Migration Patterns and Occupational Specializations of Kolkata Chinese: an Insider's History. *China Report*（New Delhi），**43**：397-410．梁慧萍著，胡修雷訳（2008）：加爾各答的華僑華人－移民模式与職業特性．華僑華人歴史研究，2008年第4期，24-32.
Ma, L. J. C. and Cartier, C. eds.（2003）：*The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility, and Identity*. Rowman & Littlefield Publishers, Oxford.
Oxfeld, E.（1998）：India. Pan, L.：*The Encyclopedia of the Chinese Overseas*. Archipelago Press. Singapore, 344-346.